

平成 25 年度 第 3 回文系チャレンジ講座を実施しました (H25/9/18)

平成 25 年度第 3 回文系チャレンジ講座が、2013 年 9 月 18 日、「“美術”の始まり」をテーマとして、本学教育福祉科学部の田中修二准教授によって行われました。遠隔配信された大分雄城台(おぎのだい)・大分鶴崎・大分商業・安心院(あじむ)・日田・高田・国東・別府青山・大分西・三重総合の 10 校(264 名)と、来学した森高校(36 名)を合わせて、計 300 名の高校生が受講しました。

今回の講座は「“美術”の始まり」を、美術史の視点から授業を開始しました。

はじめに田中先生は「物事には何にでも始まりがあって、それは“美術”でも同じです。いつ、“美術”が始まったのかということを見ると、見方によっていろいろな“始まり”が見えてきます。この授業では様々な“始まり”を、具体的な“作品”を例に、私たちに“美術”とは何か、なぜ“美術”があるのか、ヒトの役に立つのか、などについて考えてみましょう。みなさんが“美術”に限らず、いろいろな物事について、様々な見方で見ていくことができるよう、この授業が生かされることを期待しています。」と、問いかけました。

先生は「人類にとっての“美術”の始まり」を説明する中で、フランスのラスコーの洞窟やスペインのアルタミラの洞窟の壁画のスライドを受講生に見せました。「これらの洞窟壁画は、原始時代に洞窟に壁面に描かれています。どうして壁画を描いたのでしょうか。彼らは洞窟壁画を“美術”として捉えていたわけではありません。では、あの洞窟壁画がいつ“美術”になったのでしょうか。」それを論じるためには「美術」とは何かを考えなくてはならないと説かれました。

また、15 世紀後半の初期ルネサンスで最も業績を残したフィレンツェ派を代表する画家、サンドロ・ボッティチェリ(Sandro Botticelli 1445-1510)も 19 世紀頃には、「二流画家」として捉えられていました。また、未来に目を向ければ、有名な「モナリザ」でさえ今後も高評価が続くとは限らないかもしれません。長い間、美術の基準とは古代ギリシャにおいて作られたものであるとされてきました。しかし、時代によって美術の基準は変化し、現在において美術とは、「作者が“美術”と意識することが大切であるとされています。また、“美術”はどこに向かって行くのでしょうか。」と結びました。

先生はスライドを受講生に見せながら、先生自身が、近代日本美術史を研究する理由は、過去の人々の生活における営みを後世に伝えていくことが大切であると考えているからだということと、ぜひ受講生のみなさんには“美術”の不思議さと奥の深さを知って欲しいと話されました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(94%、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(99%)、「授業内容はわかりやすかった」(89%)、「板書(スライド)は適切だった」(90%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(88%)と高い評価結果がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(85%)、「映像はよく見えた」(88%)という結果がでました。

受講生の具体的な声として、「“美術”であるか否かを決めるのは、“見る人”であると言われた先生の言葉を重く感じた。」「美術に対する見方が驚くほど広がったことに驚いている。」「美術は奥深い。難しいけれど、引き込まれる。」「先生が受講生に問いかけが多く、他校生の考えを聞くことができ楽しかった。」「先生の研究に対する熱意が伝わり、大学で取り扱う学問の深さを垣間見ることができたように感じた。」など、美術に対する受講生の関心の高さに接し、多くの感想が寄せられました。

